学級担任としてのわたしの失敗
——登校拒否生徒Kの場合——

足利市立坂西中学校教諭　石　井　歳　一

1　はじめに

学校恐怖症

健康を害してとか，家庭のある事情のためとかいう客観的に認められる理由はなく，ただ本人の心理的理由から，学校へ行きたがらない状態をいう。

これを心因性登校拒否とか，神経症的登校拒否，登校拒否症などと呼ぶことがある。

本症児は学校へ行かなければならないことは承知している。

——教育相談事典から——

本校だけではないと思うが，生徒が1年生から2年生に進級するときに，成績・性格・行動・通学区域・家庭状況・友だち関係を基にして，新たなクラス編成をする。2年生から3年生へ進級の場合は，クラスの編成替えはしない。というのも新クラス編成の場合は，生徒同士の場合もそうであるが担任と生徒との間で親しい人間関係を作るのにはそれこそ時間を必要とするからである。

特に新しいクラス編成の場合では，担任と生徒との間で，相互の理解が不じゅう分であったり，ラポール（親近感）に欠けていることがあり，新年度の学期では教師にとって予測し得ないいろいろな問題が起こる場合がある。

私はこれから述べる事例も予想だにしなかった不測のことがらである。

2　新学期のとき

学校恐怖症の発生原因

学年や学期の初めに多く，病気の後・親とのいさかい・先生や友人とのトラブルなどを契機として発生しやすい。

——教育相談事典から——

新学年，新クラスで授業が開始された。私は自分のクラスに，道徳・学活・国語（4時間）とで週6時間出る。そのほか，朝・帰りのときの短学活，清掃，昼食のときに生徒たちと顔を合わせる。しかし，4月の新学期はとりわけ，クラスの事務的な仕事や行事会合がすこぶる多く，繁雑多忙でもあり，生徒理解のための時間を見いだすことさえなかなか容易ではない。

5月ははいってすぐに家庭訪問。授業は午前中で4時間。生徒の家庭が遠距離により2週間が予定されている。

新１年生の場合は，入学後，オリエンテイーションの時間が多くとってあり，授業が開始される前，担任と生徒との接触の時間は比較的多い。つまり学校に慣れさせる。生徒の不安感，緊張感を取り除くという点から，ペースが急ではない。３年生はクラス編成替えがないので，授業がスムースに進む。しかし問題は新２年生であろう。

私の担任のクラス，生徒数４３名のうち，１年生のとき国語の授業やクラブ等で名前を知っていた生徒はわずか男女計１３名。担任は４月が学級経営では勝負といわれている。私はいま反省するに，あの４月は，生徒ひとりひとりについての理解と，また，担任と生徒とのホットな結びつきに欠けていたように思われる。

突然，K君が休んだ。

５月８日　病休，かぜという。その日は家庭訪問２日目で，彼の家に予定していた日。その日からK君は翌年１月２７日（火）２時間目まで休みが続いたのである。欠席日数１７５日。

問題のかれであった。注意し観察はしていたが，K君については知らないところが多かった。

３　K の 環 境

- 出身校　　第二小学校。同窓生４名。男子はKだけ，他は女子。
- 知能偏差値　４７　（東大A－S）　　４４年４月）
- 家族　　両親健在　　父は農業だが，農閑期には近くの山へ山仕事に行く。

　　兄弟　　兄　２人。　姉　１人。長兄だけは，家庭の事情でその時進学できず会社に就職。（２３才）

　　姉はK商卒業後会社へ。すぐ上の兄はK工機械科３年（卒業後，自衛隊入隊希望）

　　Kは末っ子。父はどちらかというと家庭教育については，母親まかせ。性格はサッパリしている。母はKをでき愛している。

- 親からみたKの長所，短所

　　気がむくと仕事を熱心にする。

　　ちょっとしたことでも気にかける。わがままである。

- 通学　　自転車　　家から学校まで片道８Km。バス通学でない。

　　家はO第二小よりさらに約1.5Km奥で，このあたりは人家がまばらである。

- 友だち　　家庭　　近所の６年生の男の子

　　学校　　ひとり

４　担任とKとの間

Kが休んで初めて，彼はどんな生徒であったろうかと思い出してみる。あの４月の始業式の日から思い出の糸をたぐってみても，どしてもKの輪郭がとらえられないのである。

いつも４月の始業式前は，職員室まで生徒たちの歓声が聞こえてくる。それはおそらく，新クラス編成の発表の紙がはり出されている場所であることは明白である。新２年の場合，クラス編成にどん

なにか胸をはずませ，期待して学校に来たか想像されるし，発表の結果，無惨な期待はずれの生徒もいたにちがいない。Kもそのひとりだったのであろう。

さて，私の担任のクラスは2年8組，男22名，女21名。

始業式後，教室に行く。とまず，硬直したふん囲気を感じる。自分の名前を大きく横に黒板に書く。小さな笑いが起こる。ま新しい出席簿で名前を呼び上げる。どうも返事が小さい。緊張しているなと思った。なにかしら不安な影がよぎった。

その日は，2年生としての心構え，わたしの希望するクラスそれは明るく協力的な学級であることだけ述べた。それで終わった。Kは始終，顔をしかめて聞いていたように思う。

5 「問題生徒調査票」の記録から

（「問題生徒調査票」は　担任が作成して，生徒指導主任の水戸部先生に提出し，指導方法のアドバイスを受ける。）

- 2年生になって欠席が続くので，4回家庭訪問するが，いつも本人に会うことができない。先生が来たことを知ると裏山に逃げてしまう。本人と会っていろいろと話をしたくもそれすらできない。極度に先生や学校のことを警戒している。

  欠席を始めた理由を親から聞くところによると，宿題を消化しきれなかったからという。しかしそれが原因ではないように思われる。

  反省

  ア　新学期早々の1カ月，担任と生徒との親近感に欠いていた。

  イ　生徒個人個人に対する理解が不じゅう分であったこと。

  ウ　親類に精神病患者がいて，親が本人の発病を危ぐしているということを，ときどき面前で言ったりして，本人はそれを気にしていないだろうか。だとすれば，親に対しても自分から，健康なKの様子を説明せねばなるまい。

- 5月30日　校長先生にも一緒に行っていただく。本人に会えない。両親とだけ話合ってくる。本人は家の手伝いをするようになってきたと言う。しかし，学校のことを話しだすとすぐに家を飛びでてしまうと言う。
- 地区民生委員に相談する。（校長先生からお願いしてもらう）
- 市福祉課と連絡をとる。
- 和田指導主事のカウンセリングを受ける。（6月）

  このときは本人　学校休み。そこで校長先生，松嶋先生，民生委員それに私とで行く。仕事を手伝っているKに見つからないようにして遠くからとりかこみ，まず民生委員に行っていただきそれから，松嶋先生と私とでKのそばに行く。逃げられるのを心配してである。Kは逃げられないと思い観念した。それから松嶋先生とふたりして，Kをなだめたり，ほめたりして学校へ連れて来た。和田先生のカウンセリングを受けた。結果は良好にみえたが，次の日も欠席。

私の調査票の中の「具体的事項と処置」のらんは，それまでで，あとはしばらく空白である。

6　小学校時代の担任のはなし

6年担任のときのH先生の話

中学2年生になってそんなに長く休んでいるとは想像ができません。わたしはKが6年生のときの担任でしたが，6年生のときの欠席日数が16日であり，それも連続して1週間の休みはなかったようです。また5年生のときの休みは24日，4年生－8日，3年生－16日，2年生－8日，1年生のときは6日であってそれほど多くはなかったようです。

そう言えば，6年の夏休みのとき水泳選手として出場するときに，学校へ集合すべき時間に来てないので，家に迎えに行ったとき，どうしてもイヤだと言い，山に逃げて行ってしまったことがありました。自信がなかったからそうなったのでしょう。性格は弱い面があり，「発表」ということなどはなかなかできなかったものです。6年のときの休みが5年のときと比較して少なかったのは，複式学級で自分が上級生であり，圧迫感がなかったからでしょう。

7　中学1年のときのKについての記録

- 1年生のときの出欠席　　出席－213日　　欠席－37日
  欠席の理由は頭，歯痛であるが本人の怠惰によるもの。
- 家庭訪問の結果　　親類に精神病の者があるため，親は本人の発病を特に心配しているということだが，そんな点は今のところ見られない。
- 成績　　平均「3」の段階
- 行動の面　「積極性」のみよくはない。他は普通。
- 趣味　　さなかなつり。
- 進路　　進学希望（K工業高等学校）

8　担任のしたこと

治療

①親がつき添って毎日学校へ強制的に連れてくることを試みる。しかし問題を悪化させる場合もある。低学年の症児は行くケースが多い。

②親と子とを平行して心理療法を行なう。

③しかし症児によっては，相談・治療の機関への来所を拒否するものがある。中学生は特に多い。そこで家庭訪問をして関係づけを行なうことがたいせつ。

④強制的に適当な機関へ収容して治療を進める方法もある。しかし自主性に欠けた強制的収容はかえって症状を悪化させる。

⑤　児と面接の不可能な場合は，親などの関係者から情報収集に努力すること。

⑥面接不可能なときは，特にそうであるが，家庭において症児を親がどう扱うかの助言することは重要である。親への助言を通して，間接的に指導を行なうためであり。

私は上記の③・⑤・⑥のことについて和田指導主事から助言を得たり，また実行を試みた。

そこで，まず親に児童相談所に行ってもらい，和田先生からお話を伺っていただきたかった。というのも，子に対する親の態度が父と母とでは両極端であり，このことから私の方より和田先生の方がよいと思ってお願いしたが，Kの親の方で仕事（養蚕）が忙しくなったりして1回だけ相談所に行ったのみであった。それにしても③にあるように家庭訪問が大切なので暇をみて行く。

秋にはいって，きのこが出てくるころ，たまにKと話をする機会に恵まれた。きのこの話が出て，Kが山を案内してくれると言ったので内心喜び，日曜日，学年主任の土屋先生と行く。学校のことには触れないで一日を過ごした。Kとも話ができた。がしばらくして他日Kの家に行ったときは，この間のきのこ取りがうそかのように，私の姿を見ると逃げてしまうのである。

親はKに学校へ行けといつも言っているらしいので，私は　家のものがKについては逆になにもかまわずにしておくようにと言った。しかし母親がグチっぽく，「なんて親不孝ものだ。」と嘆く。そんな話を一部始終ものかげでKはそっと聞いている。

１１・１２月になっても，私の姿をみると逃げてしまう場合と話ができる場合とがあった。この頃になると父親は，無理に学校に行かなくてもよいから，家で仕事の手伝いでもしてくれればそれでよいという考え方で，担任として困った。

級友が行っても山へ行ってしまう。またあるときはグループで自転車に乗って行ったが，徒労に終わった。往復１６Kmの道のりは生徒にとって大変であった。彼らも何回行ったことだろう。

ある日，親から「連絡するまで来て下さるな。」という電話があって，私は眼前が暗くなった。このことばは親としては二つの意味があったかもしれない。

その一つは，先生や級友がこんな山奥まで，なん度も足を運ぶのは大変なことであるということ。もう一つは，こう寒くなって来たこのごろ，学校のことで山に逃げて行ってしまい，たとい夕方に帰って来たとしても病気にでもなっては大変であるということだったかもしれない。そこで１２月中旬から家庭訪問はまったくしなかった。責任があって苦しかった。

しかし，和田先生に指導されたように，できる限りKのところへ行ってみること以外に方法はないと思った。

1月になって，まず生徒指導のことで和田指導主事が来校された際，Kの家に行っていただく。母親とKとが在宅。Kは逃げなかった。和田先生に教育の尊さというものについて母親に話していただく。Kにもそれとなく学校のことについて話していただく。話のとき，母親が「本人は『もう学校へ行かなくてはネ』とつい先ほど話していた。」ということを話し出したそのとき，Kは自分の大切な小鳥のエサを突然，イロリに投げいれる。「そんなことは言うもんかい。」とKは怒る。エサだけがパチパチ音を立ててはじける。みんな黙っていた。

しかし帰途の車中で，和田先生がおっしゃるには，Kがあのような行為をしたのは，学校へ行く気持ちがあるからだという。大収獲だった。さらに先生方の協力も仰ぐべきであるというアドバイスも受ける。またできるかぎり訪問されたしと言われる。決心した。できうるかぎりKの家に行ってみようと。

9　45年1月の訪問メモから

1月　8日　母親と話をする。Kは寝ていて起きようとしない。（AM8：30）
無理しないで学校に行く。

10日　和田指導主事と訪問。イロリで話合い。やや希望がでてきた。

12日　Kの級友をクルマに乗せて行く。Kは山仕事を手伝っていた。これからタキギを桐生へ運ぶという。ニコニコしていた。また来ることを告げて帰る。途中　Kたちの乗っているトラックに抜かれた。暗くなっていてKの顔は助手台に見えなかった。

16日　授業のあき時間を利用して行ってみる。家人不在。K不在。山仕事か。

19日　母親と長兄がいる。長兄に　最後の一つの方法としてKを強制的に学校へ連れてくることを話す。母親はそれは心配だと言う。兄はいいかげんで心配するのはよしてくれと母に言う。

21日　5時限がアキ。昼休みからでかける。Kは朝から寝たまま。ふとんの中のKと話をするスケートのこと。病気で倒れた土屋先生のこと。クラスの女子から来た年賀状のことなど。8日ごろとは違う。いま学校へ行かなければということを本人が知ってきたのだろうか。

22日　佐野先生に行っていただく。本人家にいる。Kの前でいま学校に来ないと一生だめになってしまうと突きはなしてもらう。

23日　車2台で行く。級友3人，佐野，近藤，松嶋先生とで。本人不在。長兄がいたので，月曜日，強制的に兄さんにクルマで学校に連れて来てもらうことを約束する。

24日　放課後，級友3人をクルマに乗せて行く。入り口に行ったとき先生が来たというのを知ってか逃げる。夜，帰って来たという。

26日　約束の日。長兄が，朝　本人を起こし，身仕たくさせたところ，素直であったという服装のことで学校へ電話しているすきに山へ逃げる。

長兄はきようのため，昨日（日曜日）はクルマに乗せて，群馬の沼田の方までドライブに連れて行ったという。

いよいよのときは警察にお願いしようと思っているということなので，警察だけはよして下さいと言った。このままで帰る。

27日　2時間目，K　兄に連れられて学校に来た。兄はKをなぐってさらに無理やり車に引きずって来て乗せて来たという。Kの顔は血だらけである。まず兄を帰らせた。私が責任をもつと言い渡す。しばらくKとふたりだけで，朝から学校へ来たまでのことを聞いてみる。意外とよく話した。松嶋先生つづいて佐野先生も話に加わる。

3時間目は理科。学活にもらい，クラスの生徒の中にいれる。Kが休んでいたのは山仕事で休んでいたのだという説明をして。

すぐレクリエーションをした。

うまくとけこんだ。今後の観察・指導が大切であろう。

1月27日以後3月にはいってもKは一日も休まず通学している。3学期末のテストの成績はよく

ないが，あまり気にしてないよう。安心する。

10　感じたこと

Kが学校へ来るようになったのも，級友たちが山奥へ何回も足を運んだこともあろうし，先生がたの協力によることが大きかったと思われる。また和田指導主事や校内の生徒指導の主任のアドバイスによるところが多かった。問題児が発生した場合は，担任のひとりだけの力ではむずかしく思われ，機能的，行動的な指導組織は必要かと思われる。

しかし，担任としては，問題が発生する以前に，日常の生活の中で，生徒ひとりひとりの問題点やクラスの特徴や実態をいち早くは握しておくことはやはり重要なことである。

特に，新クラス編成をした場合は，生徒ひとりひとりをは握していなくてはよい学級経営はむずかしいであろう。私がKについて理解し，知識を持っていたならば，また親しみのある接触があったならば，Kをこんなに長く休ませておくことはなかったであろう。

4月のあの生硬なふん囲気のクラスこそ学級づくりで大切なことをいやというほど知らされた。

学校からKまでの道のりは8Km。5月からKの家に行っているうちに，ことしの3月までの間に途中の道路はあちこち舗装されていたし，河川工事も進んでいた。よい道路になっていた。

Kも毎日　元気である。

評

登校拒否症または学校恐怖症（School－Phobia　）は，比較的最近その研究が盛んになり明らかにされたものであり，日本ではここ15年ぐらい前からである。

緘黙（口をきかない）とともに．教育相談の二大双璧とされている治療困難なケースである。その要因は多種複雑な因子をもち，分類もまちまちである。

性格的要因，家族の人間関係，母子分離不安感情，アンビバレンツ（両価性），学校における人間関係（教師，級友等），本人の能力等がからみ合い，特殊な心理機制が働らくものと考えられる。したがって，治療法や指導法もいろいろな角度から研究，実践されてきたが，なかなかこれというきめ手がない。登校するようになったのも，どういう心理過程や機制によるものかなかなかつかめないものである。

このふたつの事例は，私どもにとっても貴重な研究資料であるが，現場においても指導の根幹を示す価値の高い内容である。心理学者の専門的な解明よりも，むしろ現場ですぐ役にたつ有効な内容を含んでいる。

ただ専門的には，明らかでない分野が多いので，登校拒否症の解明と治療の研究にはやゝ遠い。

従来，治療法としては，専門家によるカウンセリング，催眠療法，遊戯療法，行動療法および環境調整（母子分離）などが併用されてきた。然し，それにもまして学校における担任教師，級友による生徒指導的措置が，効果が大きいことを私はかねがね主張して，発表してきた。

担任の場合は，登校を進めるよりも，むしろ学校のことにはふれず，友だちになるつもりで子どもの興味をもつことがらを中心にして，ラポールをたかめることが大事である。

また，仲のよい友人を指導して，小グループによる集団治療が効果的である。

その意味で，このふたつの実践記録は，好個の事例である。